

海外先進教育研究実践支援プログラムに参加して

佐藤美佳

システム情報工学研究科助教授

海外先進教育研究実践支援プログラム

平成17年3月1日から6月1日までの3ヶ月間、私は、大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育研究実践支援）により、「学習アドバイザー・特殊専門教育技法の習得」を目的として、南オーストラリア大学（University of South Australia）において教育・学習システムの調査を行いました。そこで、現地での教育体制を報告させていただきます。

南オーストラリア大学

南オーストラリア大学は、総学生数が約33000人のオーストラリアでは比較的規模の大きい総合大学であり、研究と応用の融合を積極的に進める点や、質の良い学生の社会への還元を目指し特徴のある教育システムの実践で顕著な実績を上げている大学です。特に、当該大学の教育目標の一つである学生中心の学習を背景に学習の方向性

や目標設定などを助言する教育システムとして学習アドバイザーシステムがあります。

現地での教育システム

本補助事業の主たる目的は、この学習アドバイザーシステムの組織的、及び個別プロジェクトの運営とその実際の明確化、並びに導入に係る知見の取得、及び、私の専門研究分野である高度データ解析学の先端的教授法を習得することでした。この計画に基づき、まず、学習アドバイザーシステムの概要、及びその実際の詳細な調査を Division of Information Technology, Engineering and the Environment の Learning Connection を訪問し、当該全スタッフと面会の上、特に、代表者及び学習アドバイザーシステム担当者との面談から、実際の資料及び情報の収集を行いました。その内容は、組織的運営の仕方と個別プロジェクトの運営に大別できます。

(1) 学習アドバイザーシステムの組織的運営は、各キャンパスに設置された Learning Connection を活動母体として実施されており、その活動は各キャンパスに付随する各学部の特色に応じた独自運営が達成されています。大方は専任職員から構成され、その職務は、学生に対する学習アドバイス、スタッフに対する professional development services、更に留学生に対する特殊学習アドバイス等であり、この体系を根幹として各キャンパスで年間約 30 の各種プロジェクトが活動しています。このシステムは 20 年以上前から staff support として始まり、1994 年に大学が学習アドバイザーシステムに注目して以来、その影響は活動自体、及び職員の学問的資質の向上等に反映されています。年間、総学部生の 1/3 以上の学生がこのシステムを利用し極めて有効に機能しています。

(2) 学習アドバイザーシステムの個別プロジェクトの運営活動としては、学生との面談は大別し、ワークショップと個別面談があります。近況として、“On-line version of the staff” を目指し、可能な限り多くの情報を Web に掲載することを図っています。1 週間に 780 以上のアクセスがあり顕著な活用実績が見られます。従来のグループ面談、及び個別面談に加え、インターネットを利用したチャット面談を試行しております。

さらに、ワークショップ開催時の具体的注意点の調査や、それらの実績評価としての学生からの直接的アンケート評価について、電子的アンケート調査の限界と従来のアンケート調査の効率的運用について様々な解決策の試行を行っております。

つぎに、高度データ解析学の先端的教授法の習得を主目的として、School of Electrical and Information Engineeringにおける Knowledge-based Intelligent Engineering Systems Centre (KES Centre) の教育活動の実際を調査しました。さらに、これらの教育活動の一環として、当該大学で行われている Course Evaluation, Student Evaluationの実際を調査しました。KES Centre における先端的教授法の習得では、主に次の観点から行いました。一つは、KES Centre における教育は、当該センターの主要任務の一つである世界高度水準の研究の遂行と密接に関連しており、大学院学生が、それらの研究に従事するための研究環境の提供をその教育の重要な業務として行っている点であり、また、一つは、学部生に対する卓越した教授法の開発を行っている点、さらに、人材も含めた知的財産の創造とこれらの技術の産業活動に対する供与が教育活動の一環として行われている点です。その詳細は次の通りです。

(1) 核となる研究分野を詳細に分割し、そ

それぞれの研究を並列的に運営し、その基盤の下に大学院教育を行っています。大学院教育では、研究環境の十分な提供と整備を主要活動としています。

(2) 各研究分野において各種プロジェクトが実施されており、社会に対する開発技術の還元も含めた研究活動が行われています。それが大学院学生の研究母体にもなっています。

(3) 学部生に対する Course Evaluation と大学院生に対する Student Evaluation が行われており、評価対象と評価目的の観点から、その実際を明確化すれば、Course Evaluation では、評価項目は、対象の授業が如何に、卒業後の学生自らの将来的活動に対して寄与するかを問うものになっており、また、Student Evaluation では、学生の研究活動の遂行に当たり、研究情報の提供や研究資金の充実等のソフト的環境整備、並びに、研究活動に必要なハード的整備についての充足度、さらに、学生の将来的活動に対するカリキュラムの妥当性についての評価データを収集しています。さらに、これらの評価方策の実際の成果とその信頼性について追跡調査を行っております。

若干の私見

以上、南オーストラリア大学で行われている教育システムの概略を学習アドバイ

ザーシステムと高度専門教育の二つの観点から述べましたが、最後に若干の私見を付け加えさせていただきます。

(1) 学習アドバイザーシステムを導入し、その機能を十分に発揮するためには、必要予算を確保し、Learning Connection 専用の施設を整備し、専門職員を配置する等の独立的措置が必要であると考えます。

(2) 当該大学で行われている学習アドバイザーシステムの運用に関するアセスメントや授業評価からうかがい知ることができるのは、学生が、真に、何を必要としているかを知らうとする体制を作ることが重要であり、単に教育、教授のスキル向上を目指すものではないという点でありました。

(3) 「有能な学生の社会への還元」は、諸外国においても共通の教育方針として掲げられております。この場合の「社会」という言葉は、日本では、ややもすると「日本の社会」と解釈されています。しかし、当該大学においては、最初から「世界で役立つ」という視点で教育を行い、その点から留学生の受け入れにも積極的に取り組んでいます。日本の大学においても、これまで以上に国際的な評価を受ける人材を輩出する教育が必要であることを痛感しました。

(さとう みか/データ解析学)